

フリードマン「実証経済学の方法論」再考

原谷 直樹（東京大学大学院博士課程）

1. 序

フリードマンの論文「実証経済学の方法論」(Milton Friedman 1953, *The Methodology of Positive Economics*. 以下 F53 と表記) は、20 世紀後半の経済学方法論に関する論文で最も有名なものと言っても過言ではないだろうが、その評価についてはいまだに議論が続いており、解釈さえ定まっているとは言い難い状況にある。本報告の目的は、F53 とその解釈と評価を巡る議論を再検討し、現状に対する一定の見通しを与えることにある。

2. F53 の多様な解釈とその評価

F53 は発表以来現在に至るまで、多くの論者から好意的批判的両方の論評を受けているが、その初期における最も重要な定式化はサミュエルソンによる F-Twist であろう。サミュエルソン (1963) は、F53 におけるフリードマンの中心命題は「理論はその帰結 (の一部) が、経験的に有用な程度に妥当な場合に正当化できる」というものであり、「理論“自体”あるいはその“仮定”の (経験的) 非現実性はそれらの正当性や価値には全く関係がない」と主張していると捉え、F-Twist と命名した (Samuelson 1963, p.232)。そしてこの F-Twist は、もし仮定から理論を構成し、理論から帰結を導出するという過程が厳密に演繹的であるならば支持することは出来ないと批判したのである。

サミュエルソンによる F-Twist への批判は純粹に論理的なものである。つまり、ある理論 B とそれを構成する仮定の集合 A は論理的に等値であり、また理論 B から導出され現実との対応によって真偽が判断される帰結 C も、B から C が演繹操作によって導き出されているならばやはり等値である。したがって、F-Twist が示すような帰結 C が経験的に妥当でありながら、理論 B やその仮定 A が妥当でないということは起こりえない。さらに上記 A、B、C が完全に同一ではない場合を考えてみても、理論 B から導出される帰結 C の下位集合 C- が経験的に妥当であることが判明しただけでは帰結 C 全体は正当化できず、したがって理論 B や仮定 A も同様に正当化することは出来ない。逆に、仮定 A の上位集合 A+ が存在した場合にも、その正当化の可否は帰結 C あるいは C- の正当化とは独立したものとなる。したがっていかなる場合においても、F-Twist の主張するような、非現実的な理論や仮定がその帰結の経験的妥当性によって正当化されるということは発生しえない、というのがサミュエルソンの批判であった。

確かにサミュエルソンが捉えたように、理論とその仮定、そしてそれらの帰結の間の推移が論理変換作業に過ぎないならば、彼の提出した F-Twist への批判は妥当なものであろう。しかし F53 の記述を実際に見てみると、こうした把握の仕方を許さない部分が多数見出される。例えば F53(p.8) では、理論とその帰結である予測、そしてそれと事実との照応は論理的に真偽が決定されるものとはされていない。事実と予測の対応関係において決定されるのは理論の真偽判断というよりもむしろ受容可能性である。つまり、サミュエル

ソンは経験的妥当性によって理論が「正当化される」という言明を理論の「真偽が与えられる」と理解しているが、実際の F53 においては理論が「許容される」ことを意味するだけで、理論の真偽に関しては不確定のままなのである。F53(pp.8-9)ではさらに、経済学においては経験的事実が即座に理論や仮説の真理値を定めるほど決定的ではありえないということが主張されている。これに対して、サミュエルソンが見出したという F-Twist を支持するような記述を F53 の中から見つけ出すことは困難である。むしろ、サミュエルソンにおいては直結しており真偽の判断基準を与えるとされていた、帰結 C と経験的事実との間の関係のルーズさが繰り返して指摘されていると言える。したがってサミュエルソンによる F-Twist の定式化は F53 の一部の言明を過度に戯画化した、批判のための描写であって、F53 の部分的表現としても不相当であると結論づけられるだろう。

それでは、F53 における理論や仮定、そしてそれらがもたらす予測と事実との関係をどのように捉えたらよいだろうか。ボランド (1979) は、F53 を道具主義的主張と捉えることによって整合的に理解できるということを初めて体系的に示した論文であろう¹。これに対し批判を投げかけたのがコールドウェル (1980, 1982) であるが、F53 の主張を道具主義であるとする点においては両者の認識は一致している。こうした見解は、F53 における予測の果たす役割の重視に基づいたものである。

確かにフリードマンは「仮説の妥当性に関する唯一の適切なテストは、その予測を経験と比較することである」(F53, pp.8-9)と述べているし、F53(p.15)や F53(p.41)でも同様の見解が読み取れる。さらに、仮定の記述的現実性にばかり注目し、それらを直接的に改善することによって新古典派経済理論を代替しようとする試みに対しては、「この型の批判は、それらの批判点のいずれかについて批判されている理論とは異なった仮説が、広範な現象に対してよりすぐれた予測をうみ出すという証拠によって補足されないかぎりには、ほとんど要点をはずしていることになる」(F53, p.31)との反論を示している。こうした記述は、科学理論の主要な役割は当面の目的に役立つ予測を提出することであり、理論の妥当性の基準は予測を生み出す能力にかかっていると解釈することが可能であろう²。これを指してコールドウェルは、「理論は単なる道具であって、真でも偽でもない」と考える道具主義的立場であると述べている。またボランドも、F53 は哲学的な観点から見ると非常に健全な道具主義の主張であって、F53 への批判の多くは批判者が哲学的な道具主義の立場を理解していないことから生じていると論じている。

しかし、F53 が本当に哲学的な意味で道具主義的主張と考えられるかどうかについては注意深く検討する必要がある。哲学的道具主義とは科学哲学の分野における長く続いた争

¹ Wong(1973)もほぼ同様の論旨であるが、Boland(1979)の議論のほうがより包括的である。

² ここで予測の内容が、時間的に将来に属する出来事に限定されている訳ではないということに注意を向けておく必要がある。フリードマン自身が明示的に、「予測は、すでに生じた現象ではあるが、まだ観察されてはいないものか、それとも観察されているが予測者には知られていない現象に関するものであってもよい」(F53, p.9)と述べている。

点の一つである、科学理論の対象の实在性についての一方の見解である。この意味での道具主義の基本的主張は、科学理論は経験される事象を説明もしくは予測するための単なる道具であり、世界の実際の在り方については何も説明していないしその必要もないというものである。したがって、哲学的道具主義者にとっては科学理論が現実世界に照らして真か偽かということはそもそも問うことが出来ない問題である。これは、科学理論は世界の实在を正しく記述することを目指すべきであり、健全な理論はそれを少なくとも部分的には達成していると考ええる实在論とは対立する立場であるといえる。しかしメキ（1992）が指摘するように、こうした対立は観察不可能な概念を理論の中に多数含む自然科学においては重大な争点となりうるが、生活世界から概念の着想を大いに受けている社会科学においては危急の問題とはならないであろう。したがって、経済学者でこうした哲学的な道具主義の立場にたつものは非常に少ないと考えられる。

F53においても、この意味で道具主義というよりも实在論の立場にたっていると考えられる記述が多数みられる。例えば、企業の費用関数を擁護する部分でフリードマンは以下のように述べている。

企業行動を分析するばあい、かれらの目の色よりビジネスマンの費用の大きさを無視するほうがずっと“非現実的”なのはなぜであろうか。それに対する明白な答は、前者に比べて後者のほうが企業行動に重大な影響を及ぼすからということである。しかしビジネスマンたちの費用の規模に差異があり、かつ目の色が異なることを観察するだけでは費用が企業にとって目の色より重要であることを知ることはできない。明らかに、実際の行動と、それらのいずれかの要因を考慮に入れて予測された行動との間の不一致に及ぼすその要因の影響を比較してはじめて、それがわかるのである。

(F53, pp.32-3)

このような主張をする際、フリードマンにとってビジネスマンの費用と目の色は両者ともに企業行動に対して何らかの影響をおよぼす性質である。したがって両者ともに理論における仮構物ではなく、現実世界に实在するものであると想定されており、その企業行動への影響力の大小を比較しようとすることは実際の因果的要因としての強さを推定しようとすることに他ならない。このような認識は、哲学的道具主義の立場からは決して出てこないものであると言えよう。

さらに F53 には、哲学的实在論のなかでもより強い主張にたっていると解釈出来る部分が存在している。フリードマンは科学理論やその仮定の性質に関して、「有意味な科学的仮説もしくは理論が典型的に主張することは、ある特定の現象のあつまりを理解するのに、ある要因は重要であり、しかも、その他の要因は重要ではないということである」(F53, p.40)と述べている。また別の箇所では、優れた予測を生み出す理論の構成要素として、「複雑な現実の本質的な特徴を抽出することをねらった一団の実体的な仮説」(F53, p.7)が含まれるべきであると主張している。こうした言明は、経済現象について様々な因果的要因が

実在しているという認識に加えて、それら要因のなかでも最も本質的なものを的確に記述することが科学理論やその仮定のなすべき役割であるという考え方に基づいていると考えられるだろう。つまりフリードマンにとって、経済理論において仮定が果たす役割は、複雑な経済現象を単純化することでそうした現象の本質的特徴を孤立化して取り出すこととされていると理解できる。これは実在論のなかでも、とりわけ本質主義的な傾向の強い考え方であると言える。F53に見られるこうした側面を鑑みれば、F53に対し哲学的道具主義のレッテルを貼ることに躊躇せざるをえないだろう³。

しかしそれでは何故、実在的因果関係を抽出するはずの仮定が記述的に非現実的になりうるのであろうか。仮定が実在する本質的要因を指し示し、理論がそれらの因果的メカニズムを表現するのであれば、両者はともに記述的にも現実的であるべきではないのかという疑問が持たれうる。ここで注目すべきは F53 における次の文章である。

科学の基本的な仮説は、現象は人を欺くこと、しかも見かけは関連のない多様な現象が、より基本的な、比較的単純な構造の現れであることを暴露しようとするような証拠を見つけ、解釈し、組織化する方法があるという仮説、これである。(F53, p.33)

これはフリードマンが持つ、世界の実在的性質に関する非常に強い想定を示している言明であると考えられる。すなわち、世界の本質的な性質は実在するけれども日常的な生活においては知覚されることは出来ない。こうした現象の背後に隠された本質を把握し、体系的に記述する唯一の方法こそが科学理論なのである。このように考えると F53 における「仮説が重要であるためには、その仮定は記述的に偽でなければならない」(F53, p.14)という言明も理解可能なものとなるだろう。経済現象の本質は、その直接的経験の表象においてはそのまま知覚されることが出来ない。それに対して非現実的な仮定とは、一見すると現実の記述に反するように見えるけれども事物の背後に存在する本質的因果メカニズムを示しているものと考えられているのである。こうした見解に基づけば、仮定の記述的な非現実性は理論に対して積極的な価値を持つということになる。仮定が現象の背後に隠された本質を的確に表現していればいるほど、日常的な知覚からは乖離したものになるはずだからである⁴。

しかし F53 の主張を以上のように理解すると、次のような疑問が浮かび上がる。すなわち、F53 は存在論的には実在論（しかもそのより強いヴァージョンとしての存在論的本質主義）の立場をとりながら方法論的には道具主義になっているが、果たしてこの両者の結合は健全なものと言えるのだろうか。これに関してロス（2005）は否定的な判断を下して

³ Caldwell(1992)は、Caldwell(1980, 1982)では上記の論点が区別されていなかったことを認めたくえ、F53 を方法論に関する予測主義的道具主義 (predictivist instrumentalism) であると再定式化している。

⁴ ここで示されたようなフリードマンの科学的説明の理解は、通常指摘されているような論理経験主義、とりわけヘンペルの D-N モデルというよりも、どちらかというと言明的統合化説に近いように思われる。説明的統合化説の現代的展開については Kitcher(1993)を参照。

いる。ロス、メキ(1992)と同様に F53 は存在論における実在論と方法論における道具主義の二者を採用していると考えているが、この結合はメタ理論的立場としては非常に不自然なものである。したがって、F53 は実証経済学に関する方法論を提出するのではなく、実際には方法論的な白紙小切手を経済学者に与えていると批判している。これに対してメキはこの問題を、F53 を方法論としても実在論的主張と解釈することで回避可能であると論じている。両者の見解の妥当性についてはさらなる検討が必要であるが、少なくともこれまで論じてきたように、存在論と方法論の区別とそれぞれについての道具主義の役割が明示的にされる必要性は明らかであろう。

最後に方法論的道具主義に着目して検討を行いたい。理論が何らかの目的に対するツールとして理解される際に、その良し悪しの判断基準は一体何なのであるか。この点に関しては、F53 の中で反証(falsification)という言葉が一度も使われていないにも関わらず、多くの論者がポパーの反証主義との類似性を指摘している⁵。確かに、次の文章などは反証主義の特徴を端的に示していると考えられるだろう。

それ(予測:筆者)がなんども否定されずに残存しつづけるならば、その仮説は大いに信頼されることになる。事実の証拠では仮説を“証明する”ことは決してできない。それはただ仮説の誤りを立証することができないというだけであり、やや不正確であるが、われわれが経験によって仮説が“確認された”というばあい、一般に意味するのはこのことなのである。(F53, p.9)

しかし一方で、現代の科学哲学史においては、ポパーの反証主義を厳格に適用することの困難さがすでに明らかにされており、それを乗り越えるために多くの試みがなされている。果たして F53 も、こうした素朴反証主義に対する批判にさらされてしまうのだろうか。

フリードマンは別の箇所で「科学には確実ということは決してなく、したがって、証拠が仮説の支持または棄却に対してもつ重みを完全に“客観的に”評価することはできない」(F53, p.30)とも主張している。つまり必ずしもナイーブな反証プロセスを支持しているわけではないのである。他にも、最大化仮説の検証に関して、一方でそれがこれまでの研究のなかで否認されなかったということを支の理由としながら、実際にはそれらが直接テストされることは少なく、個別事象の研究において間接的に適用可能性が論じられているので証拠として提示することは難しいと述べている。そして、「仮説を支持する証拠というものは、その仮説がくりかえし否認されなかったということから成りたっているのが常であり、その仮説が用いられるかぎり絶えず積み重ねられていくものである」とし、「長期間にわたって、その仮説が絶えず用いられ、受け入れられ、そしてまた整合的で自己矛盾の

⁵ フリードマンは、F53 執筆以前にポパーの科学方法論に関する著作を読んだことはないが、第一回のモンペルラン・ソサエティの会合においてポパーとの会話から彼の方法論的アイデアに強い印象を覚えたと言っている。詳しくは Hammond(1992a)を参照。また、Mayer(1993)においても、メイヤーとフリードマンの個人的やり取りにおいて、同様の言明がフリードマンから得られたことが紹介されている。

ない、なんらかの代替的な仮説が展開され、ひろく受け入れられるということがなかったこと、こうしたことがその仮説の真価にたいする強力な間接的証拠になる」(F53, pp.22-3)と主張するとき、フリードマンは経験による直接的な反証主義というよりもむしろ、ラカトスのMSRPに近い考え方を示しているようにみえる。ここでは仮説の選択における科学者集団の役割が強調されていると言えよう。あるいは、「ある仮説が妥当性をもつからといって、それだけで代替的な諸仮説のうちからそれを選択するにじゅうぶんな基準とはならない」(F53, p.9)という主張も、反証プロセス以外の選択基準の必要性を述べていると解釈できないであろうか。

F53をMSRP的に解釈することを支持するもう一つの証拠は次のような言明から得られる。フリードマンは、「実証的科学の究極目標は、いまだ観察されていない現象について妥当で有意な(すなわち、陳腐でない)予測を生み出すことのできる“理論”もしくは“仮説”を展開することである」(F53, p.7. 強調は筆者による)と述べて、単なる予測ではなく、新奇な事実を予測することの重要性を指摘している。こうした新事実の意義の強調はMSRPの広く知られた特徴の一つである。したがって、理論選択の基準に関しては、F53は通説的に理解されているよりも穏健かつ複雑な見解を示しているといえよう。ここでもF53の見解を単一のものとして示すことは不可能であるが、少なくとも科学哲学的に時代遅れの素朴な基礎付け主義的発想であるとして片付けられるほど単純な議論がなされているわけではないのである⁶。

3. 結論にかえて

以上に示したように、F53のなかには多岐にわたる論点それぞれにおいて、様々な哲学的・方法論的主張として捉えられる記述が体系的な整理なしに複数示されている。また、これまでのF53への論及の多くはそれらの一部分に着目したのみであり、全体としての複雑性を等閑視してきたと言っておよいだろう。こうした議論に対してメキ(2003)は、F53の複数の読解可能性自体を正面から受け止めて、F53を様々な方法論的主張の混合物(F-Mix)として理解すべきであると主張している。しかし、本稿におけるF53の詳細な読解から示唆されたように、F53の構成要素には相互に矛盾し両立し得ないという意味で混在不可能な方法論的主張がいくつも存在している。したがって、F53をF-Mixと捉えること自体は正しいとしても、それだけでは不十分であり、さらに進んでそれらの構成要素を個々に検討し、妥当性を論ずる必要があると言えるだろう。

(紙幅の都合上、参考文献表は省略し、当日配布)

⁶ F53の多様な読解可能性は、部分的には次のような解釈も可能にする。フリードマンが経済学者の証拠は決定的なものではなく、満足なテストがなされない場合には「必要な判断は手持ちの不十分な証拠に基づいておこなわざるをえない」と述べ、テストが可能な場合においても、「それを行う科学者たちの背景は、かれらの到達する判断と無関係ではない」(F53, p. 30)と論じていることからF53を社会構成主義として読むことも出来なくはないだろう。